

特集

# 復活、自作山車

—— 伝統のまつりが今、蘇った。 ——

大きな山車の上で打ち鳴らす太鼓に合わせ元気な掛け声が秋空に響く。9月5日から3日間、今年も「ふだいまつり」が盛大に繰り広げられた。

今年の山車は40年ぶりに復活した下組・上組の自作山車だ。彼らは満面の笑みを浮かべ山車を運行させた。

今では「ふだいまつり」といえば山車がメインだが、村のまつりに山車が登場したのは今から70年前の昭和13年。しかし、山車の制作には時間と労力とそして金がかかる。

山車組では金銭的な問題も含め、昭和40年代に入り、久慈市や青森県八戸市の山車を借り受け、現在までまつりを継続させてきた。

そんな中、国道の使用上の問題などで、今年から山車の借り受けが不可能となった。それはまつり存亡の危機だった。「今年のまつりには山車がでないのか」。そんな声さえ、ささやかれた。しかし、熱い思いを持った人たちはいつの時代にもいるものだ。「借りられないなら、自分たちで作ろうじゃないか」。

山車組の男たちが立ち上がった。台車の発注、山車のテーマ、制作方法など、すべてがゼロからの出発だった。

「当日までに完成するのか」。そんな不安が常にあったという。しかし、彼らはずいに見事な山車を完成させた。村のまつりの歴史をひもときながら、自作山車復活に掛けた熱き9カ月を追った――。

## 山車の共演、伝統の舞い、みんなが燃えた3日間



下組の自作山車「大江山鬼退治伝説」。大迫力の鬼を背に太鼓を打つ手にも力が入る



もちまきも行われた



元気に太鼓を打つ子どもたち



色鮮やかな上組の山車



八幡宮の前でパフォーマンス



上組の自作山車「豊年祈願七福神」。村の特産品を飾り豊年を祈願する



子どもたちの相撲に声援!



みこしで参加した普中生



まつりの最後を飾る「懸賞盆踊り大会」。駅前広場にはたくさんの人



伝統が引き継がれる普代中神楽同好会の「中野流鶺鴒七頭舞」